

## 「新興」スケート・リンク

——『京大俳句』の誓子憧憬について——

青 木 亮 人

はじめに

山口誓子は新興俳句に深甚な影響を及ぼした、とされる。

新興俳句 俳句用語。昭和六（一九三一）年から同一五年までの約一〇年間にわたり、反伝統・反『ホトトギス』を旗印に近代的革新をめざした俳句運動。（略）特に誓子の句集『凍港』（昭九）に代表される硬質で即物的な作風と、高屋窓秋の句集『白い夏野』（昭一〇）に代表される清新な詩情とが大きな影響を与えた。（『俳文学大事典』角川書店、平成七・一〇・二七、「新興俳句」項（川名大執筆））

昭和初期に発生した新興俳句とは、当時の俳壇で最大規模を誇った『ホトトギス』（東京、明治30年創刊。高浜虚子主宰）に反抗した俳人達の潮流であり、それに強い影響を与えたのが誓子の第一句

集『凍港』（素人社、昭和七・五・一五）であったという。そして、新興俳句の端緒と発展は次のように説明されるのが一般的である。

昭和六年（一九三一）、水原秋桜子の「ホトトギス」離反事件をきっかけに始まった新興俳句運動は、全国にまたたくまに広がった。（略）その中心として活躍するのが、昭和八年（一九三三）一月創刊の俳誌「京大俳句」の関係者だった。（田島和生『新興俳人の群像——「京大俳句の光と影」——』思文閣出版、平成一七・七・二〇、「新興俳句の金字塔「京大俳句」項」）

新興俳句発生が昭和六年であるのは、『ホトトギス』有力同人であった秋桜子が『馬酔木』（東京、大正一〇・四創刊（当初『破魔弓』）。秋桜子主宰）に虚子批判を公表した年であるためで、以降、「反『ホトトギス』」としての新興俳句は「全国にまたたくまに」広がり、また中心となったのが『京大俳句』（京都、主宰者無。平畑

静塔発行) というのであった。この定説をまとめれば、「秋桜子の『ホトトギス』離反(昭6) + 誓子『凍港』(昭7)等」新興俳句運動 II 俳誌『京大俳句』(昭8) が中心」となる。

では、たとえば『凍港』所収句は『京大俳句』にどのような「大きな影響を与えた」(『俳文学大事典』) のであろうか。ここに至った時、従来の通説は口を閉ざしがちである。

そこで、次の『凍港』所収句群に注目したい。

アサヒ・スケート・リンク

スケート場四方に大阪市を望む

スケートの紐むすぶ間も逸りつ、

スケートの真顔なしつ、たのしけれ

スケートの君横顔をして憩ふ

汚れたるスケート場は黄とんぬぬ

四方の玻璃スケート場を映す夜ぞ(他五句省略)<sup>①</sup>

これらは連作と称される句群で、一句のみでは表現が困難な時間推移等を複数句で提示する句法であり、秋桜子及び誓子が主唱して有名になった。本稿はこの「スケート」連作と『京大俳句』の関係を検討することで、「全国にまたたくまに広がった」(前掲『新興俳人の群像』)とされる新興俳句運動の一端を分析するものである。

## 1. 昭和初期のスケート事情

俳句を検討する前に、日本のスケート史を概括しておこう。スケートは明治初期に居留外国人が始めたとされ、明治末期には信州や東北地方に住む日本人達にも普及していったことが知られている<sup>②</sup>。代表的な湖は諏訪湖で、『風俗画報』はその活況を次のように記した。

毎日曜日には外来者、地方人士連合の氷滑競技会あり。(略)

熟練者は、或は渦を描いて旋り、或は跳舞しつ、滑走し、或は後方に逆戻るなどの曲芸を演じ、時の移るを忘る。(『氷滑競技

会』『風俗画報』37号(明治40・2))

明治末期、諏訪湖に「外来者」「地方人士」が日曜に集い、「氷滑(スケート)競技会」を催していたこと、また現在のフィギュアに類したスケートに興じていたことが窺える。そして、当時の「外来者」は鉄道を利用して湖等へ訪れるのが通例であったため、スケートは旅行を兼ねた冬の行楽でもあった。

野外の湖が主舞台であったスケート状況は、昭和期に入ると一変することとなる。それは都会に室内リンクが出現し、汽車で遠くの湖に出かけずとも都心で享受しうる娯楽となったためであった。『増訂スケートイニング』(河久保子朗、博文館、昭和11・12・4)等によると日本初の室内スケートリンクは大阪市岡パラダイス(大正

14・7)であったが、リンクは約七〇坪と狭く、またアンモニア製氷であったために臭気のこもる施設であったという(『朝日新聞社史』(社内用、昭和54))。しかし、昭和期に入るとより広く、天然氷に近い人工リンクが陸統と登場しはじめることとなる。それは大阪朝日ビル屋上リンク(昭6)、大阪歌舞伎座、東京芝浦スケート場、京都スケート場(ともに昭8)等であった。

これら室内リンクが昭和七年前後に揃って出現した背景には、オリンピックの影響が大きかったと推定される。昭和七年は第三回冬季オリンピック開催(アメリカ、レークプラシッド。2月4―15日)の年で、日本人選手がスケート部門に初参加した大会であった。そのため新聞、雑誌等で記事が急増しており、国際スポーツとしても注目されはじめたことが窺える<sup>③</sup>。山口誓子が「スケート」連作を発表したのはこの昭和七年であり、スケートが都会の最新の遊戯として、またスポーツとして人気が高まった時期に作品が詠まれたといえよう。誓子自身も次のように回想している。

極めて頻繁に通ひ出したのは、朝日ビルが建つて、その屋上にスケート・リンクが完成し、その燈火が夜空に高くかがやき出してからである。私は毎夜氷上に過ごし、そこであまたの人々を見知つた。

昭和六年、アメリカのレークプラシッドで開かれた冬季国際

『新興』スケート・リンク

オリムピックに、この氷上から選手が派遣された。選手が帰朝したとき、会館で講演と映画の会が催され、私も寥々たる聴衆の一人であつたが、(略)はじめて世界のスケートを知つた。

〔海の庭〕(第一書房、昭和17・4・30)「大阪文化の特性」朝日ビル近くの住友に勤務していた彼は仕事を終えて「毎夜氷上に過ごし」、そして「スケート」連作を詠んだのであり、彼が室内リンクのスケートに熱心であつた様子が知られるが、レークプラシッド大会に出場した「選手が帰朝したとき、会館で講演と映画の会が催され」、そこで「はじめて世界のスケートを知つた」という一節からはオリンピック参加選手が愛好者達に刺激を与え、彼らのスケート熱を一層高めた様子が窺える。誓子作品の背景にはスケートに対するこのような関心の高まりも存在したのであつた。

ところで、俳句において「スケート」はいつから、またどのように詠まれてきたのか。現在、「スケート」は冬の季語(季節感を喚起させる語)とされて歳時記(季語を四季ごとに分類したもの)に立項されるが、当時はどのような季語であつたかを見てみよう。

## 2. 歳時記における「スケート」

「スケート」立項の早い例には「明治新題句集」(富取芳河士編、文成社、明治43)が知られ、以後は各歳時記に立項されるようになる

つた。以下は大正末期から昭和初期にかけての歳時記である。

・『大正新修歳時記』（高木蒼梧編、資文堂、大正14・11・25）

氷滑り スケート。池又は湖などの氷結したる上を滑る遊びなり。

スケートや氷上に焚く接待茶

黙人

音楽や氷滑りに人酔へる

碧梧桐

・『昭和新修大成歳時記』（星文閣、昭和2・11・15）

氷滑り スケートチング スキー 池又は湖の氷上を滑る遊戯

なり。スケートチングも亦其種にして西洋に行はるゝもの

スケートや諏訪の旅籠の蜷汁

一紫

襟巻を風になびかせスキーかな

花村

・『詳解例句 纂修歳時記』修省堂、今井柏浦編、昭和7・1・

25（23版）。初版は大正15・12・20）

氷滑り スキー。スケート。

音楽や氷滑りに人酔へる

碧梧桐

スケートや氷上に焚く接待茶

黙人

・『昭和新選俳句大観』冬之部（林蛙面坊編、大文館書店、昭和

8・5・20）

スケート

谷深くスケート場の見ゆるなり

大阪 麻葉

・『歳時記』（高浜虚子編、三省堂、昭和9・11・15）

スケート 氷滑りである。

氷上に張りし天幕やスケート場

金童

句の詳細は省くが、これら歳時記の傾向は以下の通りである。

・昭和初期までは漢語「氷滑」が片仮名「スケート」より上位で、「氷滑」はスケート及びスキーを含む季語とされたが、昭和八年頃から「スケート」が「氷滑」より上位となり、かつ「スケート」はスケートのみを指すようになる

・以前の立項内容を踏襲する歳時記が多い（『大正新修歳時記』↓

『詳解例句 纂修歳時記』の例句、あるいは『大正新修歳時記』

↓『昭和新修大成歳時記』の説明等）

・例句の多くが切字「や」等を使用

・全て野外であること

・単独の一句のみで詠まれていること

・「スケート」の動作自体は詠まれず、主体が静的であること

すなわち、誓子の連作発表は「スケート」が歳時記で定着した時

期に相当するといえよう。では、俳誌における「スケート」句も歳

時記と共通の特徴を有していたのであろうか。

### 3. 諸俳誌の「スケート」

まずは『ホトトギス』所載句である。

スケートの手を曳きつれし姉妹かな 大連 高林三代女

スケートの木の間に見ゆる車窓かな 紅石

スケートや唯一人なる洋婦人 晃水

〔昭和4・4、50頁。地方俳句界、やまと吟社句会（満州、大連）句会報告より〕

中国大連市からの句会報で、手をつないで滑る「姉妹」（一句目）、

「車窓」から見える木の間越しのスケーター（二句目）、「唯一人」

でスケートを滑る「洋婦人」（三句目）を詠んだ。舞台はおそらく

野外で、また切字を使用する点も歳時記の例句と類似しよう。次は

日本における「スケート」句である。

スケートに人皆出でし炬燵かな 唐淵

（昭和4・5、35頁。地方俳句界、東京つるばみ吟社（王子））

スケートや月下の雪の山まろく 太里

（同右号、40頁。地方俳句界、わぶか吟社句会（武蔵、埼玉））

スケートを果て、湯槽や山の月 賜杖

（同右号、46頁。地方俳句界、二十人第四十八会報（須磨））

一句目は、「皆」は「スケート」に外に出かけたが室内に自分の

「新興」スケート・リンク

みが「炬燵」にくるまっており、二句目は雪に覆われて稜線に丸みを帯びた「山」を眺める場でスケートをしているのである。三句目では「スケート」で汗を流した後、露天の「湯槽」に浸かりながら「月」を眺めるのであった。多彩な内容ではあるが、表現とともに先述句群とさしたる相違は見られない。

次は『ホトトギス』系の『かつらぎ』（奈良、昭和4年創刊。阿波野青畝中心）所載句である。

スケートの支度整ふ暖炉かな 所沢 菅野春虹

（昭和4・6、21頁）

「暖炉」で暖まった室内で「スケートの支度」を終え、室外の湖面に出かけようとする句であるが、「スケート・暖房」という配合が「スケートに人皆出でし炬燵かな」（先述）と類似している。

『ホトトギス』系以外の俳誌からも見てみよう。次は明治期に

「口派」とされた俳諧宗匠の俳誌、『俳諧鴨東新誌』（京都、明治17

年創刊。花の本聴秋・花の本秋邸主宰）の「スケート」句である。

スケートに日毎埒なき女かな 陸中 柳風

（昭和2・2、16頁下段）

スケートに踏む朝月や冬の湖 信濃 酉水

（昭和2・3、23頁上段）

スケートに賑ふ山の小駅哉 遠江 紀川

六九

(昭和6・3、28頁下段)

口を追うことに「スケート」に「埒なき」ほどまで熱中する  
 「女」(二句目)、または早「朝」の「月」が「冬の湖」に映る暁頃、  
 氷上の「月」を鋭く「踏む」かのように「スケート」靴のエッジを  
 走らせるのであり(二句目)、あるいはいつも閑散とした「山の小  
 駅」も「スケート」シーズンは「賑ふ」というのである(三句目)。

これらと『ホトトギス』所載句に明瞭な相違が存在するか否かは  
 疑問であり、同工異曲といつてよい。このことは、『ホトトギス』  
 から離反した『馬酔木』(水原秋桜子主宰)所載句も同様である。

スケートの紺の襟巻垂れし人

溌人

(昭和7・2、39頁。秋桜子選)

「スケート」に興じる人の「襟巻」に着目した句で、「紺色」でか  
 つ「垂れ」ているという把握は具体的かつ新鮮であるが、斬新な趣  
 向とはいえない。それは、『馬酔木』主宰の秋桜子「葛飾」(馬酔木  
 発行所、昭和5・4・1)所収句においても同様であった。

スケートや雪被ぬはなき諏訪の山

スケートや目もはるかなる一人あり

湖の四方を囲む「諏訪の山」全てが雪に覆われ、その壮大な情景  
 を一望しうる位置に立っていることの感動を、「雪被ぬはなき」と  
 して主観を込めた「は」及び「なき」で強調した一句目、また諏訪

湖の広さを「目もはるかなる」遠方で滑る「一人」に焦点を当て  
 ることで表現し、かつ「も」でその距離を強調した二句目など、表  
 現技術は巧みであるが、従来の趣向内の作品といえる。<sup>④</sup>

これらの「スケート」句は次の共通点を有しているよう。

- ・片仮名「スケート」をほぼ使用
- ・多くが野外であること
- ・切字「や」「かな」を多用
- ・「スケート」の動作そのものを詠まず、主体は静的
- ・単独の句のみで詠む

このような特徴は、「スケート」を使用する点以外は歳時記の例  
 句と同様といつてよい。<sup>⑤</sup>では、誓子の「スケート」連作はこれらに  
 対しどのような特質を有するのであるうか。

- ・片仮名「スケート」を使用
- ・舞台は人工の室内スケートリンク
- ・切字は一一句中三句のみ(「けり」)。「や」は使用せず
- ・「スケート」の動作そのものを詠む傾向があり、主体は動的
- ・連作として一一句詠む

誓子作品は室内リンクでの「スケート」を一一句詠んだ点、また  
 「や・かな」の切字を使用せずに「スケート」場での一連の動作や  
 現象を具体的に詠んだ点が新鮮であったといえ、彼自身も従来と異

なる句作を心がけていたことは次の一節からも知られる。

近ごろ私が試みにうたつてゐるのは工場、造船場、ドック、

汽船、商館、スケートリンク、ホテル、ダンスホール、そのほか法廷などという都会の生活、生産ならびに消費の両面にわたつて俳句の領域を拡大してゆきたいという意図である。(「梅と俳句」『サンデー毎日』昭和8・2・5)

「都会の生活」を詠むことで「俳句の領域を拡大」するというのであり、誓子は新鮮な「領域」スケートリンク」をあえて選択し、そして従来と異なる表現で詠んだのであつた。

このような誓子の「スケート」連作は、内容と表現の双方において強い影響を与えることとなる。まず、彼が舞台とした朝日ビル屋上リンクを詠んだ句を見てみよう。

朝日ビルスケ<sup>リンク</sup>リンク

冬の蝶青嶺はるけく澄みまさる

大阪 水谷碎壺

(「京大俳句」昭和8・5、43頁)

朝日ビルスケート場

スケートの今日は遅き娘手あげ来る

大阪 岸風三樓

足あげてスケートダンスちよと跳びぬ

(「ホトトギス」昭和9・3、103頁。雑詠欄(虚子選))

朝日ビルスケート場

「新興」スケート・リンク

楽はげし乙女紫の息をつぐ

山口水星子

(「句と評論」12・3、51頁)

一句目は屋上リンク独特の眺望を詠み、「スケート場四方に大阪市を望む」(連作一句目)の趣向に倣いつつ、「七月の青嶺まぢかく溶鉱炉」(誓子「凍港」所収)の措辞を借りた句である。二句目は「スケート場」で興じる「娘」を、また三句目は「スケート場」に流れる「楽」に合わせて滑る「乙女」を詠んだ。この四句は切字を使用せず、また「澄みまさる」「あげ来る」「跳びぬ」「息をつぐ」と下五に動詞を置いて動作そのものを詠んだ点など、誓子句の特徴が見受けられる。岸風三樓は「京大俳句」会員、また「句と評論」は新興俳句の俳誌であり、新興俳句系の俳人達が誓子句から影響を受けていたことが窺えよう。そして、次にあげるのは誓子「スケートの真顔なしつ、たのしけれ」(連作三句目)を意識したと推定される「ホトトギス」所載句である(傍線は引用者)。

槽くべてスケートづかれたのしけれ

千花子

(昭和8・8、37頁。各地俳句界、星光吟社〔撰津、豊中〕)

スケートを穿いてころんでをさなけれ

東京 田村了咲

(昭和9・1、101頁。雑詠欄(虚子選))

スケートの人織る如くたのしけれ

木浦 合田波一郎

(昭和13・5、88頁。雑詠欄)

句の詳細は省くが、「こそ」を省略した係り結び「たのしけれ・をさなけれ」という表現は誓子句から得たものといえ、この表現法は『ホトトギス』のみならず地方俳誌にも散見されるのであった。

スケートに転びし靴の重たけれ

逸果

〔青風〕昭和10・2、35頁。大阪住吉の俳誌）

転倒して起きあがろうとした時、滑走中に意識しなかったスケート専用の編上「靴」の重量を実感したのであり、それを「重たけれ」という措辞で強調した句であった。これらは一例であるが、誓子の「スケート」連作は『ホトトギス』派及び新興俳句派の双方に影響を与え、地方俳誌にも及んでいたことが窺えるのである。そして、誓子句から最も刺激を受けたのが他ならぬ『京大俳句』であった。

#### 4. 『京大俳句』の「スケート」

『京大俳句』は京都帝国大学出身の平畑静塔、井上白文地、藤後左右等が集った俳誌で、彼らは『ホトトギス』及び『京鹿子』（京都、大正9年創刊。鈴鹿野風呂主宰）、そして『馬酔木』に属する俳人達であった。しかし、彼らが私淑したのは誓子であり、彼の句に並々ならぬ憧憬を抱いていたことは誌面から窺えるが、それはたとえば『凍港』輪講冒頭に如実に示されている。

静塔　こゝに我々が常に畏敬して止まない山口誓子氏の第一句集「凍港」の輪講を続け得らるゝ、事の光栄を欣びたい。（『凍港』輪講（一）冒頭、『京大俳句』昭和8・2）

このような彼らが「スケート」連作に多大な影響を受けたのも、いわば自然であったといえよう。では、それが具体的にどのような作品として現れたかを昭和八年五月号（42頁、日野草城選）所載句から検討してみよう。

歌舞伎座スケートリンク

シヤンデリヤスケート場の青き宵

大阪 片山桃史

スケートの渦がしづかに玻璃の中

スケートの真顔ま顔が玻璃に来る

大阪歌舞伎座六階のリンク（昭和8）を舞台とし、三句目の「真顔ま顔が玻璃に来る」から察するに作者はガラス越しにリンクを覗覧しているのであろう。一句目は、室内「スケート場」の「シヤンデリア」にまず着目し（野外スケート場に存在しないため）、その「青」色の人工の照明にこそ「宵」を感じたのである。二句目では、「スケート」に興じる人々と靴のエッジが残りゆく氷上の軌跡を「渦」と表現し、またガラス越しにリンクを眺めているためエッジが氷を削る音を聞くことはなく、「しづか」なのであった。そして三句目は、真剣な面持ちで滑走するスケーターが「玻璃」に向かっ



てやって来るさまを詠んだのである。この連作のうち二句目は『馬酔木』昭和八年四月号雑誌欄（秋桜子選）に入選しており、「渦」は後続の「スケート」句でも使用されることとなる。

照明のアイスリンクの渦に酔ふ 京都 秦正民

（『京大俳句』昭和9・1、49頁）

夜間スケート場にて

ゆるやかに白き渦より放れ来ぬ 丘水城夫

（他二句省略、『句と評論』昭和12・3、51頁）

スケートの渦の外輪にゐてはやき 神戸 神谷青楓

（『青嵐』昭和12・3、43頁）

野外の湖と異なり、狭いリンクにひしめきながら弧を描いて滑る人々と氷上の滑走跡とを「渦」と表現した句群で、滑走中の人々及びリンクが「照明」に照らされ、その「渦に酔ふ」という一句目、エッジで削られた氷上の「渦」を「白き」とし、そして「渦より放れ」てこちらへやって来たという二句目、人々の「渦の外輪」ではあるが「はやき」スケーターを詠んだ三句目である。このように、「渦」は室内スケート場の類型として広まったのであった。<sup>⑥</sup>

ところで、滑りゆく人々を「渦」と表現した桃史の連作は『京大俳句』次号（六月号）で次のように評されている。

保人―この句からすぐに、誓子氏のスケートの真顔なしつつ楽

『新興』スケート・リンク

しけれ、四方の玻璃スケート場をうつす夜ぞ、といふやうな句を思い浮かべました。（『諸誌雑詠批評会』）

他会員達もこの意見に同調しているが、興味深いのはその上で桃史作品を肯定的に評価している点に他ならない。特に一句目「青き宵」に関しては「誓子氏の青き宵を句調の上から持つてこられたのではあるまいが」と留保しつつその意味を議論しているが、これは彼らが誓子の「スケート」連作はもとより「除夜たのしワルツに青きかりさす」（『凍港』所収）等を前提として論評していることを示しており、『京大俳句』会員達が誓子作品を暗誦するほどに親炙していた様子が窺えるのである。<sup>⑦</sup> 桃史の連作一句目が誓子句の措辞を応用したことはもとより、リンクが「玻璃」に囲まれている状況を詠むことで室内スケート場を強調した二句目は誓子句と同趣向である。また三句目は「真顔」という措辞に加え、下五「玻璃に来る」と動詞終止形で言い切る表現も誓子句からの影響と推察されるが、『京大俳句』会員達はこれらを踏まえた上でかえって桃史句を評価したのであった。

このような彼らの誓子に対する憧憬が顕著に現れたのが、『京大俳句』昭和九年一月号（30頁）である。

街の角スケートリンク赤き灯を 太田蟬郎

スケートの青き夜楽の流れるる

七三

スケートの静かな曲に乙女あり

スケートの疲れよるべきものとは

寺野保人

スケートの疲れ茶の椅子固けれど

スケートの疲れ紅茶はさめてゐる

スケートの乙女に触る、人はなく

井上白文地

スケートの乙女はしかと手をつなぎ

スケートの流れの中に転びある

スケートの杓が削ぎたる痕ぞかし

スケートの楯円の渦が右まはり

舞台は京都市河原町三条下ルの京都スケート場（昭和8）であり、『京大俳句』同号に白文地が次のように記している。

最近京都にスケートリンクが新設され、本会のモダンボーイを以て任ずる魚遊、蟬郎、保人等がいちはやく登場、一時間に六十何回もひつくりかへつて、一躍そのレコードホルダーになりました。（井上白文地「編集茶話」）

蟬郎句は、河原町通に面したリンクの「赤き灯」を見て後スケート場に入場し、桃史の連作を踏まえつつ「青き夜楽」を耳にする。そして、銀盤上ではその「静かな曲」にあわせるように「乙女」が滑るのであった（あるいは場内で佇んでいる）。当時、室内リンクにはワルツ等のレコードが流れており、次は誓子の一文である。

スケエト場に来ると、ワルツ風の音楽が奏でられ、銀盤は既にあまたのスケエタアによつて踏み荒らされてしまつてゐる。

（『俳句文学全集 山口誓子篇』〔第一書房、昭和12・10〕）

蟬郎句は室内リンクに顕著な「ワルツ風」の「青き夜楽」に注目することで、従来の野外スケートと異質であることを強調したのであった。

保人句は「スケート」に「疲れ」、「よるべきもの」を求めて休憩用「椅子」に座るも「固く」、かつ飲み物の「紅茶」はすでに冷めていたが、「疲れ」たためにもはや厭わず休んでいるのである。当時の京都スケート場内には喫茶店も併置されており、保人句はその喫茶店を詠んだのであろう（『京都学区大観』〔長塩哲朗編、京都市学区調査会、昭12・9・1〕第15章4節のスケート場の説明より）。また、白文地の連作においては「乙女」が主体であるような構成が採られている。「楯円」を描いて滑る「乙女」を「人」は「触る」、「ことなく眺めているが、ひとたびバランスを崩した「乙女」は「人」と「しかと手をつないで体勢を保とうとする。しかし、結局転倒したため「杓」のエッジが氷上を「削ぎたる痕」が遺り、そのため彼女の描いた「楯円」が「右まはり」であったこともリンクに明瞭に刻まれた、というのである。

誓子の「スケート」句は女性を「をんな・君」として詠んだが、

蟬郎と白文地は「乙女」という呼称を使用しており、これは後続の「スケート」句でも詠まれるようになった。

神戸アイス・スケート場風景

とつくにのをとめも夜々のスケートに 神戸 喜多青子

(『京大俳句』昭和9・5、31頁)

スケートやリンクの乙女微笑みつ

山本焔

(『青嵐』昭和10・2、35頁)

朝日ビルスケート場

楽はげし乙女紫の息をつぐ

山口水屋子

(『句と評論』三章前掲)

「夜々」現れる異国の「をとめ」、「リンク」上で微笑む「乙女」、音楽に合わせて滑るもそのリズムの早さに「息をつぐ」「乙女」……誓子句に端を発した白文地達の作品は、室内リンクに「乙女」を見出すというさらなる類型を流行させたのである。

このように『京大俳句』等の「スケート」連作は表現、内容ともに昭和初期の歳時記及び『ホトトギス』等と全く異質であり、そこに誓子句の強烈な影響を見るのは容易であろう。ここで問題となるのは、新興俳句運動が「昭和六年、水原秋桜子の「ホトトギス」離反事件をきっかけに始まった」(前掲『新興俳人の群像』)という史観に他ならない。この通説は運動の契機となった出来事を指摘した

『新興』スケート・リンク

点での確といえるが、新興俳句とされた俳人達の句作現場にも妥当する史観なのであろうか。この時、新興俳句に与えた影響を次のように感じていた同時代俳人達の発言が注目される。

清二郎 新興俳句の主張は何の影響が一番多いですか。

草田男 実に雑多ですが、その中ではやはり、新興芸術派の都会文学の影響が多いでせうね……。もつとも、誓子さん個人の

影響の多いことは予想外ですが。(『座談会』『ホトトギス』昭和10・7、54頁)

中村草田男は、新興俳句には「誓子」という「個人の影響」が顕著に見られると指摘しており、実際に『京大俳句』を発行した平畑静塔の本心は誓子主宰俳誌の発刊にあったという。<sup>⑧</sup>

そのような誓子への憧憬は、『京大俳句』の「スケート」句にも如実に現れているといつてよい。『京大俳句』創刊前には、誓子のみならず『ホトトギス』に反旗を翻した秋桜子もまた「スケート」句を詠んでいた。しかし、『京大俳句』会員達が熱中したのは誓子の室内リンクを詠んだ連作であり、秋桜子からの影響は見当たらないのである。『京大俳句』は新興俳句の代表誌とされるため、俳句史上では秋桜子及び誓子の影響が強かったと捉えがちだが、句作の現場では誓子の影響を強烈に受けていたのではないか。

おわりに

『京大俳句』の「スケート」連作は一面では誓子の模倣に過ぎないという判断も存在しよう。それと名指しはしていないが、たとえば『ホトトギス』の高浜虚子は次のような発言を度々行っている。

虚子 今の若い人の作るものを見ると、俳句としてこれを見る場合、不熟、幼稚、生硬。憐むべきものが多い。(「座談会」中「都会美」項、『ホトトギス』昭和10・9、46頁)

「都会美」を詠む「若い人」とは、新興俳句の俳人達に他なるまい。<sup>⑨</sup>虚子の発言は『京大俳句』の「スケート」句を指したわけではなく、新興俳句とされる新進俳人達を漠然と評したに過ぎないが、彼らの「スケート」句はこのような批判に対抗しうる「反伝統・反『ホトトギス』」(前掲『俳文学大事典』)を体现した作品であったかといえば、微妙であろう。

しかし、彼らは「反『ホトトギス』」以前に、誓子のような作品を詠みたいという願望に突き動かされて「スケート」句を詠んだのではないか。『京大俳句』会員達にとって、室内リンクへ赴いた時の見聞を連作で表現することは誓子が確立した世界観を手軽に共有しうる瞬間であり、かつ従来と異なる「スケート」句を創造しうると感じられたひとときでもあったろう。「若い人」の集まりである

会員達にとって、あからさまな模倣こそが誓子憧憬の素直な表明ではなかったろうか。

『京大俳句』は結果的に新興俳句の代表と目されたが、そこには多様な潮流が存在しており、『京大俳句』のみを新興俳句の特徴とすることに慎重な判断を要しよう。しかし、彼らの「スケート」連作には新興俳句の一特徴が見られるといえる。すなわち、「全国にまたたくまに広がった」(前掲『新興俳人の群像』)とされる新興俳句の潮流の一つに、誓子に憧れた俳人達とその模倣句を發表することで誓子句の世界観が一挙に増幅し、かつ消化されていく中で「またたくまに」類型として定着していく過程が存在していたのではないか。

これは、斬新であった誓子の「スケート」連作が一方では容易に模倣しうる作品であったことも意味している。『京大俳句』の「スケート」連作群は、当時の誓子作品が読者に与えた魅力の要因が何であったかを、そして彼の句を明瞭になぞることが自身の俳句観の表明となった「今の若い人」(虚子)達による新興俳句運動の一面を、如実に示してはいないであろうか。

注

① 「スケート」連作は『ホトトギス』昭和七年五月号雑誌欄(虚子選)、

同年六月号雑誌欄に分割されて入選しているが、本稿の論旨上「凍港」所収句として扱った。この連作が新興俳句に与えた影響の考察には栗田靖「山口誓子」(桜楓社、昭和54・9・20)等があるが、印象批評に留まっている。なお、誓子連作の全体と背景を考察したものに、拙稿「スケートリンクの沃度」幾(「スポーツする文学」(仮)「青弓社、平成21年出版予定」所収)がある。

② 日本のスケート史に関しては、『スケート発達史』(ベースボールマガジン社、昭和56・11・25)に詳しい。

③ たとえば、『アサヒ・スポーツ』では昭和七年前後にスケート記事が多く取り上げられ、レックブラシッド大会の様相も記されている。

④ ただし、『馬酔木』昭和七年三月号に次の句が見える。

朝日ビル、アイススケート場風景

スケートや屋上にして流行りけり 焼山(43頁)

スケートや屋上ジャズに暮れてゆく 同(44頁)

「朝日ビル」「屋上」のリンクを詠んだ句で、誓子句より発表が早い。句の表現は凡庸であるが、「スケート場」がビル「屋上」にあるという新しさ、また場内の音楽を「ジャズ」と具体的なジャンル名で詠んだ点など素材の新鮮さが窺える作品である。

⑤ 歳時記が「氷滑」を上位に置き、俳誌上の句が「スケート」を使用したのは、新鮮な表現を求める実作では「スケート」が多用され、歳時記では「氷滑」が従来通り踏襲されたが、昭和八年頃より双方に「スケート」が定着したといえよう。

⑥ 室内スケートで滑る人々を「渦」と表現する類型は、石田波郷「鶴の眼」(沙羅書店、昭和10・11・25)収録の「スケート」連作(昭和10年作、於釜浦スケート場)の影響が大きいと推定される。詳細は別稿に譲りたい。

「新興」スケート・リンク

⑦ 平畑静塔は、『京大俳句』に集った俳人達は「凍港」時代の誓子句をほぼ暗記していたと回想している(『新興俳句運動の興亡』「平畑静塔対談俳句史」(永田書店、平成2・5・28)所収、40頁)。「京大俳句」誌面からは、それが事実に近い形跡が窺える。

⑧ 平畑静塔「新興俳句運動の興亡」(前掲「平畑静塔対談俳句史」、39頁)に見える。ただ、会員達にかくも仰がれた誓子は当初「京大俳句」顧問を務めたが、後に無季俳句問題に際し『京大俳句』と袂を分かつこととなり、両者の関係を一概に述べることは困難である。また、『ホトトギス』/『京大俳句』・「誓子」という区分けも、会員達の多くは「ホトトギス」雑誌欄の投句経験者で、誓子自身「ホトトギス」同人であり、そして彼の「スケート」連作が「ホトトギス」雑誌欄で発表されたことも考慮すると、それは多様な要素を捨象した図式ではあるが、論旨を明確にするため使用した。及び、『京大俳句』等の新興俳句運動は初期と後期で様相を異にし、それに伴い誓子への見方も変容しているが、本稿では『京大俳句』初期に焦点を置いて考察した。

⑨ 「ホトトギス」座談会等において、虚子や中村草田男等は新興俳句全体には辛辣である一方、誓子作品を高く評価している。